

式 辞

確かな春の訪れを感じる柔らかな早春の日差しに包まれ、明日への希望もいよいよ膨らむ弥生三月朔日、同窓会長 海老原洋子様、教育振興会長 堀口芳明様、PTA会長 井上英光様 をはじめ、多くのご来賓の皆さま、そして保護者の皆様の御臨席を賜り、群馬県立高崎女子高等学校第七十五回卒業証書授与式を盛大に挙行できますことは、本校にとりましてこの上ない喜びであり、これまで本校教育の充実、発展にご尽力いただきました、関係各位に改めて感謝申し上げます。ただ今、本校所定の全課程を修了した二七七名に、その証として卒業証書をお渡しいたしました。諸君、卒業本当におめでとう。振り返れば、諸君が高女に入学を果たした令和二年四月は、全世界が未知のウイルスである、新型コロナウイルスの感染恐怖に脅える、まさにパンデミックの最中であり、厳戒態勢で行われた入学式の後には、休校、そして家庭学習と、憧れの高女に入学を果たした君たちの日々は異例づくめでありました。そうです。君たちは此処高女にマスクをしたまま入学し、休校のため、高女の魂とも言える校歌指導も受けないまま、高女生活をスタートさせ、そしてその姿のまま今日卒業の日を迎えた唯一の生徒たちとなりました。君たちが過ごした高女での三年間は、常に感染症対策に明け暮れた日々であったのです。本来ならば高女生として取り組むはずであった多くの行事が縮小、延期、そして中止となったのです。その折々における哀しみ、悔しさ、憤り、そんな君たちの心情を思うとき、私には何の言葉もありません。そんな君たちの心情を痛いほど知りながら、数々の決定を下してきたのは、校長である私です。学校の代表者として、慚愧に堪えない、の一言に尽きるのです。しかし、そんな君たちともに高女での日々を過ごし、校長として、高女ではこれまでの経験を活かしてこんな取り組みに挑戦したい、こんな行事を立ち上げたいと願いながら、決して適うことなくこの日を迎えたのも私であります。君たちと同じく、ここ高女で口惜しく日々を過ごしてきた校長として、私なりの最後のエールを送りたいと思います。無論特に新しいことではありません。これまでさまざまな機会を捉えては君たちに語りかけてきたことであり、かつては教師として常に生徒たちに話してきたことです。ですから、この式辞にはニーチェもゲーテも、Sophieも登場しません。

今日はひとりの教師として最後の授業のつもりで話したいと思います。言うまでもありませんが、高女を巣立っていった後も、優れた能力を持ち、大いなる意欲と可能性に満ちた君たちには、それぞれの人生において、きっと何度も何度も大きな転機が訪れることでしょう。そんな人生を開花させることができる大きなチャンスや挑戦の中で、是非君たちにいつも心に留めておいてほしい問いかけがあるのです。それは、決断を下す今の自分は「これで本当に生きていると言えるのか」という問いかけです。君たちの多くは、昨年末から先月にかけて、人生の新たなステージを目指して死に物狂いの努力と挑戦を重ねてきたはずです。この後もまだまだ厳しい試練をひかえている諸君も多いこととは思いますが、今はそんな日々を少し振り返ってみてください。大事な試験の前日はどうでしたか、試験のことを思うと、気持ちが高ぶって眠れない人もいたのではないですか、本番の試験会場はどうでしたか。そこでは誰も彼もが優秀に思え、重圧に押しつぶされそうになりませんでしたか。しっかりと憶えてきたことが急にあやふやになり、不安になりましたか。しかしながら、そんな数々の不安と必死で戦い、ドキドキしながら試験官の「始めてください」の合図を待つ瞬間、まるで全身の血液が逆流するかのような感覚、胸の高鳴りが聞こえてきたのではないですか。そうです。それが「生きている」ということです。何かに無我夢中で向かっていくエネルギー、それは若さであり、生命の尊さ以外のものではありません。それが生きているということですよ。

生きていくということとは素晴らしい。これが総ての教育の礎であり、学校が生徒に教えないければならない真実です。憶えているでしょうか、共通テスト前のリモート集会において、私は「明日は、君たちが本当に欲しかったものを獲りに行くときだ」と話しました。私は、そうした挑戦の連続こそが人間の人生なのだと思っていて、これまで指導してきました。

そんな人生は言葉でなど簡単に表現できない感動があります。無論君たちも経験したように、時に夢は潰れてしまふときもあるかもしれない。しかし、だからといって、それまでの努力には意味がなかった、などと決して言ってはいけません。意味などというものは、言葉の世界のものであり、後で都合の良いようにどうにでも書き換えられるものですが、言葉を超えた感動は心の世界のもので、誰も自分の心に嘘はつけない。自分だけは騙せないのです。しかし、それでも、夢潰れた自分を心でどうすることもできないときもあるでしょう。でも、それまでの挑戦に心底心の奮えるような感動があったのなら、次は必ず勝てる、いやもしかしたら、その次も夢は潰れてしまふかも知れない。でも、強い感動を胸に秘めている人はいつか必ず勝てる。なぜなら感動こそが君たちの心のエネルギーだからです。君たちが自らの進路実現に向かった挑戦はどんな感動をもたらしましたが、その素晴らしいさを知った君たちには、これから先の挑戦にもきっと素晴らしい感動が待っているでしょう。

以上が私の最後のエール、最後の授業であります。卒業生諸君、高女で君たちが学ぶことはもうありません。今こそ、君たちの魂の歌にある、パワーフレーズ「尊き力を身にもこそ持つて」巣立つときです。もう君たちを高女生と呼ぶ者は誰もいません。今ここから、君たち、一人ひとりが高女なのです。一人ひとりが高女として、自分自身の人生を堂々と進んで行くのです。そして、君たちの目指すところが高崎女子高校の紛れもない未来になります。そして、今日その席を立って、未来への一步を歩き出すとき、どうか、どうか君たちの旅立ちを一心に見つめる後輩たち、高女生の姿を睨に収めて欲しいのです。卒業式では在校生はリモート参加で良い、そんな意見もありました。私の心も揺れました。しかし、マスクをしたまま入学し、様々な制約を受けながら今日この日を迎えた君たちにどうしても、この光景を見せたかったのです。これが、君たちが巣立っていく母校、高女です。高崎女子高校とはこういうところですよ。約一千の瞳が君たちを眩しく見えています。自分たちも後にくと密かに誓う者たちばかりです。そして、その誓いによって高女の歴史は綿々と、堂々と、そして誇り高く未来に続いていくことになるでしょう。

結びになりましたが、保護者の皆様、お子様のご卒業誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げますとともに、生徒たち同様、保護者の皆様も様々な思いに揺れた3年間であったことと推察致しますが、時代の大局を鑑み、これまで本校の教育活動に対し、惜しみないご支援、ご協力を頂きましたことに深く感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

卒業生諸君、いよいよお別れです。コロナ禍での窮屈な高校生活、そんななかでも一緒に努力を重ねた友達、大きな目標に向かって一緒に戦った部活動の日々、そんな総ての瞬間が君たちの真実でした。これから先の人生の時々、振り返ればいつでも勇気と感動がこみ上げてくる、それが高女での日々であったはずです。今、栄えあるこの高崎女子高等学校に新たな歴史を刻んだ諸君を大いに誇りに思うとともに、諸君一人ひとりの今後の大いなる飛躍と大成を心から祈念し、式辞といたします。

令和五年三月一日

群馬県立高崎女子高等学校長

濱野 雅樹